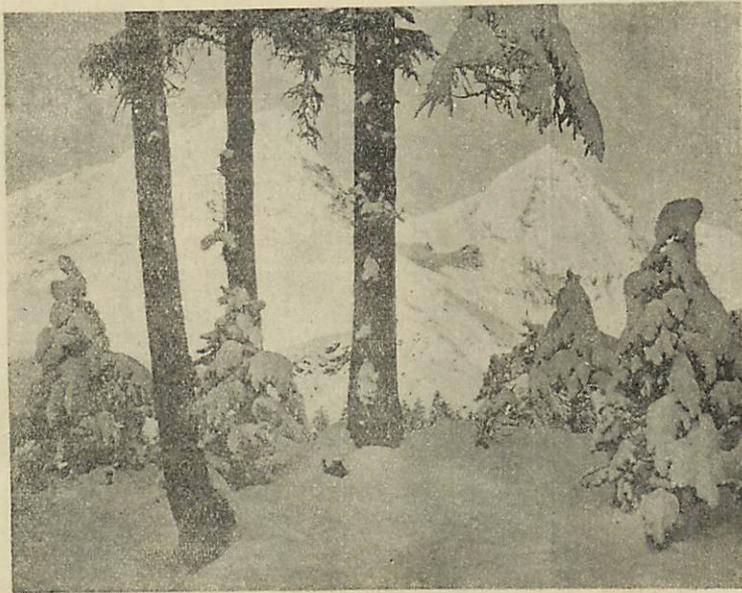


山とスキー

第九十八號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和五年二月三日印刷納本

昭和五年二月七日發行（毎月一回）

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 八 十 九 第

記 事

秩父アルプススキー登山

小 池 文 雄

〔一〕

冬の十勝岳の思ひ出

大 戸 健 一

〔七〕

一九二八年 *Atari-Pamir* 遠征日誌より (一)

W. R. Rickmers
古 山 甲 二 抄 譯

〔七〕

雜 錄

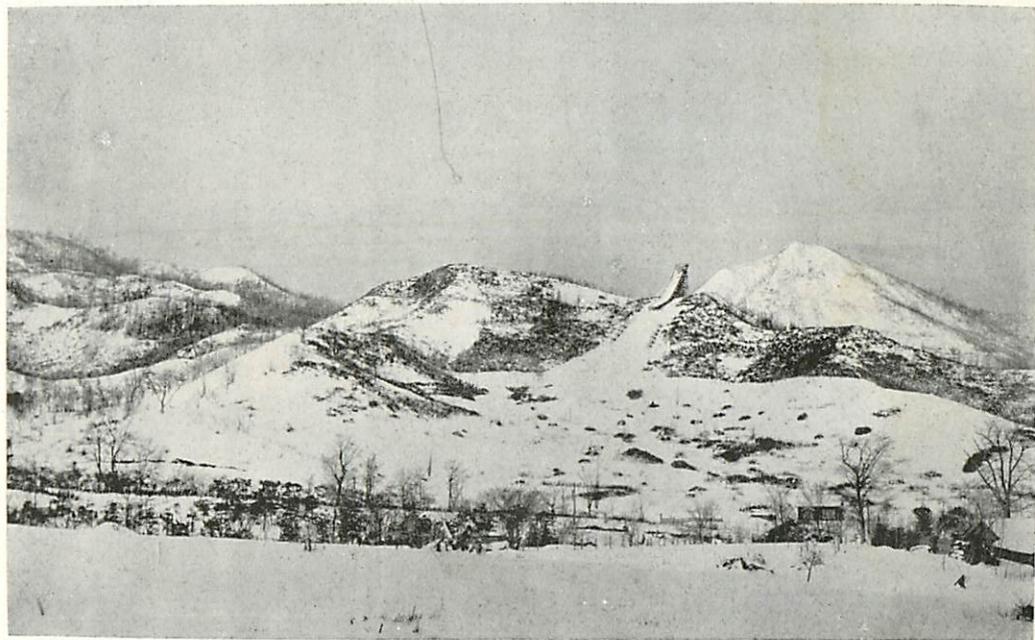
〔三〕

寫 眞 版

記念シャントエ

外 三 葉

昭和五年二月發行



秩父アルプススキー登山

小 池 文 雄

一九二九、十二月末日、秩父山塊に小旅行を企てた時の記録です。勿論、仕事を持ち家を持つ我々オールドボーイは、制限された時日内に旅を楽しむに過ぎないので、學生時代の様な敢爲な、力に満ちたツアーを決行する機会に乏しいことは、誰しもが持つ一様の悩みであらうと思はれます。加ふるに四散した友の間に共通の時間を見出すに苦しむ結果、稍もすれば單獨行に陥り易く、従てパーティにて旅する場合に比して、其の力を半減されるのは、何としても忍び難い所です。以下蕪雜な記録を、一、計畫。二、實地踏査。三、結論。四、紀行の順序に従て記したいと思ひます。

一、計畫及豫想

秩父は自分に取つて、未知の所ではあつたが、地圖を見た時に、其の屈曲甚しい、山麓を持つた、深成岩の山懷に、如何なる程度にまでスキーを使用し得るか、又地圖上に畫いた豫定のコースは實際現地に當つて、如何なる範圍まで符合するか。其の興味に誘はれて、スキー登山の對照としては、あまり面白くもなささうな、秩父の山々に、足を踏み入れた譯です。

旅行前の計畫としては南佐久郡川上村大字川端下區の、青年會に冬期、金峰山、國師嶽、朝日岳。甲武信嶽方面の積雪

狀況、氣象、山小屋の有無を問ひ合はせた所、十二月一日頃に於て、山頂で三尺位、中腹、麓で二尺位との報を得たので、スキ一の操作には幾分か不充分とは思つたが我慢すれば、スキ一を操縦し得ると考へたのであつた。次に山小屋は甲武信ヶ嶽には完全なものがあるとの事は各地山岳部の、年報等にて知り得たが、國師嶽、金峰山、方面には山小屋としては全然無いが、朝日岳と國師嶽との間の澤（東俣）と、金峰山と、小川山との間の澤（西俣）には造材小屋が所々に點在してゐるとの情報を得た。根據地は、川端下の部落は勿論遠過ぎて不可であるし、西俣と東俣との合流地點（地圖参照）は國師嶽、金峰山、兩方面に便利であるが、根據地の標高と、山頂との標高を、可能の最大限度に於て、眞の垂直登行差を縮めんとの見界からすれば、更に谷奥に宿泊可能の小屋がある以上、之れを使用しないのは、良好なるハンデキャップを放棄するに等しい。それで、國師ヶ嶽方面は、東俣の製材小屋を根據地とし、金峰山方面は、西俣の製材小屋を根據地とするべく、腹案を立てた。甲武信ヶ嶽への根據地は梓山より、千曲川の源流をさかのほり谷間に炭燒小屋なり、岩小屋なりを選定して、登頂する心算であつたが、後述の理由で、之れは決行せずに残念乍ら殘して歸つた。

登らうとする對照の山々は、

國師ヶ嶽（二五九一・八米）

大岳山（二六〇五米位？）大岳山は陸測五万分の一には記載無く、川上村方面にて國師南方の山を呼稱する如きも、甲斐方面にての奥千丈嶽は、二四〇九・四米峰に對して名付けられ、國師嶽附近に鼎立する三峰の中、二六〇〇米以上の標高を有する一峰に、大岳山と付する事にした。

朝日岳（二五八・一米）

金峰山（二五九五・〇米）

スキ一の使用範圍。

之れに就ては色々推測を下した結果、大約、一四〇〇米以上の山地は全部積雪に蔽はれ居るものと思ひ、山頂は輕きウ

インドクルステで藪山の性質上、金カンヂキ、ピツケルは不用であるか、或は必要とする個所あるも、之れ無しにも濟まし得ると考へた。

豫定のコースの選定。

積雪少き森林帯の斯かる山に、スキー登山を企てる際に、其の成否の如何は、一に懸つてコース選定の適否にあると考へられる。而してスキー登山に於ては、夏路は殆んど頼るに足りない事は、明白の事實である。然るに積雪二、三尺の程度の地方に於ては、冬期に於ても、夏道がおほるに認められ、夏道以外は、藪等の爲め通過するに由なき、個所に屢々遭遇するのであるから、何の程度まで夏道をたどり、如何なる範圍に於て、自由コースを選定するかは、其の地方の地質、傾斜、積雪の如何に依て、容易に斷案を下し兼ねる問題で複雑なる要素が相互に關聯するものと思ふ。

一、國師ヶ嶽登高のコースに就ては根據地の位置判明せざりしも、川端下より國師ヶ嶽に到る登路としては、最初、溪谷に沿うて進み、一七一四米の谷底標高の地點より先の道を何れに探るか疑問であつた。(圖に於ける黒の實線が想定登高路を示す)國師ヶ嶽と朝日岳の尾根の中間のコブ(二四六〇米の標高)より北方に派出する尾根は、五百米許にして二つの尾根に分派するが、其の左方の緩傾斜の稍や廣尾根と見るべきものに、登路を求め σ のコブに到り、其より尾根傳ひに頂上に到るものであつた。其の外、P點より二二六九米の獨立標高點に到るものは、其の前半は登路として、殆んど無價値である。又此の外、A B B' W C' C' D'なる線も考へたが、W'間が急傾斜で問題であるし、尾根の登り降り日は日短の冬期に於ては、垂直登高度に大なる損失を與へるし、廻り道でもあり、豫定線は大體 σ C' D'線とし其の上は現地目撃の上考察する事にした。

朝日岳。之れは當初あまり考慮に入れて置かず、東俣を根據地として先づ尾根筋 σ に達し縦走して金峰に到る途次餘猶あらば立寄りん位の心算でゐた。

金峰山。第一案は、東俣の何れかの小屋を根據地として朝日岳の尾根に出て鐵山を経て本峰頂上に到るA B B' C' σ の線

であつた。これはW⁰間の急登高とC⁰の尾根縦走の時間の問題であつた。(これは遂行されずに終る。)

第二案として根據地を西俣に設定し、金峰山より北方に出る屋根が谷の合流點(一八〇〇米)に落つる邊まで、夏道を拾ひ、夫より夏路と別れなるβ⁰の線に由りて登頂せんと企てた。

甲武信ヶ嶽。之れに到る登路は夏路は、二四八三、三米峯より北方に到る尾根が左右に谷を兩分したるものの中、左方の急谷を取るか或ひは大山側の廣谷を探るかに迷つたが、左方の急谷を走る路は谷全体の傾斜は緩いが最後の頂上直下の登りが急であるので、右方の谷の夏路をたどる事に決めた。(これは豫定を立てた丈けで決行せずに終る。)甲武信より二三七九米峰に縦走し、梓川上流に滑降する降路も考へたが梓川上流に、製材小屋あるを知らざりしたため確たる豫定を立て得ざりしは残念なりき

二、實地踏査

(一) 國師嶽

十二月廿五日夕刻、川上村川端下區に到着し東俣に根據地として使用し得る製材小屋あるを知りしため、廿六日、林董氏を荷擔ぎに頼み東俣に進出す。A、P、Qの三地點には夫々小屋あり使用に適す。Aは製材事務所跡、Pは製材所、Qは白田營林署監視小屋。廿六日午前十一時半、P點に達す。數日來稀の快晴なりし故、登路研究のため、僅か許りの食料と、防寒具を携へて、谷奥に進む。營林署小屋を過ぎて間も無く朝日岳より澤と、國師岳よりの澤との落合に來た。左に取れば山道、右に探れば朝日岳方面に到る。右に道を探り、約一丁程して更に道は二分し右は大ナギ林道を経て、甲州秋山及び國師岳、朝日岳に到るもの。左は梓山林道を経て國師岳に到るものとあり。左を探る。道は尾根らしき所を通り、約一時間の後、山を右にヘツリ國師よりの澤に入る。雪は約二尺スキーの操作に不便を感じず、傾斜はスキー登行に支障なき程度。橋を渡り約三十分間の急登高の後小さき尾根らしきものを超え、更に二百米許り、山右に「トラバース」すれ

ば一つの尾根を超え、路は下りになる此の時、路より右に反れ緩傾斜の尾根を昇る事、一時間、國師嶽主峰に達す。午後四時、頂上は圓き尾根で、一等三角點がある筈なれど、雪に埋れて判明せず、之の行は出發時刻も遅く頂上迄行く豫定にはあらずしも思ひがけなき好天象に恵まれ機會は一度取逃がすと、容易に來ないので、途中でプランを變更して頂上までのしてしまつた。夏路が途中まであつた事と、好天氣に幸された事、午後遅くまで、天氣が變らざりし事が此の偶然の成功をもたらした。

朝日岳。十二月廿七日、午前六時二十分、A點を發す。今日は大ナギ林道を経ての點に達し、尾根の切分を通つて、金峰に歩を運ばんとして出でしも、天候と時間の關係で途中で豫定を變更して、朝日岳に登つて引返す。故に之れは當初は朝日岳への心算ではなく、金峰山行が、朝日行となつてしまつた。圖上の點線A B迄は前日午後の通り、Bより右に大ナギ林道をたどり、約二時間の後八時二十分頃、澤傍ひのどん結りW點に達す。A B W迄は程よき傾斜で木材搬出の木製軌道あり。滑降に適す。Wに形ばかりの堀立小屋あり、雪吹込み居る。天幕あらば露營し得べし。Wにて谷を右岸に渡り、急坂の森林帯に入る。雪は少くボサ（ボヤ、藪等の方言）多く岩石積雪下に隠れ居り、唐檜の矮樹、石南花、多く夏路以外は通過出來ず、加ふるに夏路は急傾斜にして、アザラシを付けたるスキーと雖も尙後滑りす。歩を運べばスキーは雪下に隠れたる、唐檜の枯棒、岩石を踏み徒らに後滑りし。アザラシ皮は破損し、離脱する事、數回。昨日の快晴は今日は何處へやら、午前八時と云ふに早や空は灰色にボヤケ、朝日岳の峯には狹霧襲來し、惡天候の前兆を告ぐる事しきりなり。光明と勇氣を與へ呉れる太陽は、厚い雪雲の上において姿を見せず。多大の困難と勞苦を費して午前十一時漸く二三〇〇米の等高線附近まで昇る。朝日岳より北に走る尾根の露岩の箇所。一二四二〇・二米の峯等を幾度見上げては依然として我より高く、我が高度の進まざる事、實に齒がゆい。冷き粉雪はサン／＼と降り積み、密林の山中寂として聲なし、訪ふものは峯に狂ふ嵐の梢を鳴らす音、午後零時十五分尾根の一端の地點に達す。西風の加減が思つたより峯は吹雪が強くな、密生した大樹が風を餘程まで殺いで呉れる。金峰行は此の風で而かも此の時間では思ひも寄らぬので朝日岳に行く事

にして尾根上を西に進む約四十分、午後一時過ぎ朝日岳頂上に着、昨日の祝福された行に比して今日は何たる悲惨の行旅であるか、銀に光る金峰山の頂上の緩斜面、埋まつた偃松地帯、國師の峰から東望した時の力ある、甲武信嶽三方。破風岳の三ツのコブも何も見えない。大樹の上をかすめる風の音のみ強い。早々にして峰を辭す、一時半二三〇〇米邊の密林中のスキーデボに到着、往きには短氣を出して此所でスキーを捨てたが峰の切分けに行つてから後悔した。アザラシを付けたまゝ降る、非常に具合が悪い。急坂の悪場で徒歩で下つた方が早さうなので、スキーを脱いで擔いで下る。トララゲンすれば所々に引掛つて却つて勞作が多い。時々徒歩が飽き疲れてスキーを履くが扱如何ともし難い。只履いて見たゞけ暫くすると又嫌になつて脱ぐ、こんな事を繰り返して二時半、Wなる簡易小屋跡に到着。火も焚かうと思つたが、火が付かぬ。此所にてアザラシ皮を外してみる、美鋸が二ヶ所も引きちぎれてゐた。スキー登高で今迄こんなに苦勞した事は無かつた。三時W點から滑降する。天候が悪變して氣温が上昇したゝめ、普通ならば飛び過ぎる往路のW B B Aを氣持よい濕粉雪にステムされ乍ら二十五分でA地點に歸着。小屋の側から煙があがつてゐる。投げ出された様に爐端に横になる。

(二) 金峰山

十二月廿九日。昨日一日休養して天氣と睨めつこをしたが今日も曇天峰は吹雪いてゐるはすまいか、一日休んだので大分体力が出て來た様な氣がする。明日は大丈夫天氣になる氣がするので、今日は道踏みの心算で、カステラ二本、シロツブの溶液一瓶、密柑、ズボン一枚をリュックに入れて、西俣の造材小屋を後にする。小屋の前から橋を渡り幾度も出遭ふ杣道と別れ右に取り乍ら進む。路は深林下を通る昨日の雪は樹枝上に積つて下に積らぬため路上は四五寸の小雪、石コロや樹の根の錯雜した道。スキーはかついで行く。こんな個所が谷が南に曲がる地點、瑞牆山への別道(圖の西俣と云ふ字の東方の谷の落合)まで續く。やがて八幡の小祠を過ぎ、水晶山(瑞牆山とも書く)への分岐點を過ぐる頃から川を左右に渡る回数多く。樹木無き露出地で積雪多きため、スキーを履く様な場所に度々出遭ひ、又密林下に入つて雪少なくスキ

一を脱いだり、非常なタイムロスをして九時頃β地點に到着す。空模様はあまりよからず。それより澤傳ひの夏道らしきあとをたどりβγ線に添つて登る。登路の傾斜線の切り方が不規則でスキー登行をするに非常に努力を要する。一方夏道以外は殆んど通過不能路は徹頭徹尾大樹(唐檜)の密林内で自分の位置さへも判明せぬ。時々霧の間に右手の夏路のついでる尾根と、對岸の小川山の尾根が見えるがまだく自分の位置は低い。最初は今日は單にラッセルだけで明日再舉を計る心算だったがこんな無味乾燥な勞多い路を再び來るのが嫌になつたので今日天氣は悪いが行ける所まで行つて來る事に決めて道かはかどらぬにも不關、どんく登る。大きな岩石と凹凸激しい急峻な山側。二丈餘もある大きな石南花而かも下を向いてるて全く始末が悪い。十一時半頃γ(赤字)地點に岩穴を見付け漏れたツボンを履き換へ、レモンシロツブを飲んで元氣を付け、又藪と岩根と苦闘する。少し行くと向つて右手の尾根が明るくなつて、尾根筋が近づいたらしいので、右に斜登して幾分緩斜の尾根に出たが相變らず石南花のブツシユはひどい。尙も精限り根限り登ると漸く唐檜の丈も低くなり、石南花の藪が今迄よりも密になつたと思ふと灌木帯を抜けて、上の偃松地帯に達した。此所は一面の廣原で僅かに頭を出した、偃松が暴風にさいなまれてる頂上迄は僅か二百米位の距離であるが獨特の尖岩も見えず、ハードクラストでスキーの條痕も付かず、カンヂキも携帶せず、たとへ足跡が付いても直ぐ吹き消されてしまふ。こんな廣尾根で迷つたら最後である力を制限して使用せねばならぬ單獨行の悲しさ、臆病風に誘はれたか、自重したのかわからぬが尻尾を巻いて二五〇〇米の高度まで來たのをせめてもの慰めとして退却す。時に午後零時四十分。下りは忠實に登路を下る。アザラシを外してスキーをはいたが、何をしてゐるのか自分にも愛憎がつきる程じれつたいが仕方が無い。でも登りよりは少しは早い併し蠢いてゐる程度で、一層、徒歩で轉け落ちた方が増しな位だ、短氣を出してスキーを脱いだり、又雪漕ぎに疲れて、スキーを履いたりした。始めはこんな事は徒にタイムロスと許り思つたが身体の各筋力を平等に疲勞せしむるために、必然的に肉体的に斯かる不自然なコンピネーションを欲する迄に身体が參つて來たのだ。上から降る雪と、樹上から風で落ちる雪と、汗のために肩は中まで漏れて浸み透つて來てギンくする程冷い。体力は大分弱つてゐる。ガン

ケや木の根、枯棒でスキーは役立つ。雪は或る所は二尺位、所によつては五寸位。一先づ休んで残つた、カステラの一片をカヂツて漸く元氣を快復し、點に歸着。更にあとの一里はブーツとしてフラフラで四時、西頃製板小屋着。夕方風呂に入り飯を食つた頃空が一時的に、晴れて明日の好天を思はせたので、何糞ツ、も一度あの頂上の尖岩の所まで行つて見る氣になつたが間も無く曇る。天氣がよかつたら明日こそはと云ふ氣で寝たが翌朝、空模様がかばかしくないので断念す。

三、考 省

此の金峰連山をスキー登山の對照としての價値は先づ零に近いものと云つて過言では無からう。勿論季節に依りて積雪量に多少の相異あらんも、若し強ひて冬期登山を企てんと欲せば二月末か、三月中を最も好季節として推して可ならん。二三月の候は西俣も大半は凍り詰り、通し通行出來得る所も多からんとは土地の古老の言である。スキー地探索の興趣を以て此の地に来るならば兎も角、スキーの技術的滑降感に酔はんとの念慮で來るならば此の地を訪ふて、單に大なる失望を残して歸るの止むなきに到るであらう。積雪は山頂近くに於て、漸く三尺、麓（一六〇〇米の谷間）に於てはスキーの使用さへ不可能の二三寸の雪あるのみ。多くの他の高山岳が中腹以下が、スキーによく七、八合目以上はアルバインテクニクに依らざる不可るに、此の地に於ては二三〇〇米以上の僅かの部分がスキーに稍や適し他の大半は殆んど使用不可能の個所多きは注目に値する。然らば斯かる山地の冬期登山（一月十二月）の用具は何を推すかと云ふに矢張りスキーの他に無いと思ふ。たとへ輪カンヂキがあつても金峰山北面の如き急雪面は寸進尺退で、スキーと同じ時間と努力を要すであらう。若し使用するとせば大町邊の輪カンヂキの様に下面に木製の牙の付いたものが便利であらう。急坂で徑二三尺の小岩石が轉がる凸凹多き山側面は、實に始末に困る。スキーでも、輪カンヂキでも澁滞の程度は大同小異であらう、否恐らくは輪カンヂキでは或ひは登山不可能かも知れぬと思ふ。



- 凡例
- 實地登降路
 - 豫定コース
 - ◎..... 宿泊可能ノ小屋
 - 露營之得ル小屋 (岩小屋)

次に天候は北アルプス方面に比して、稍や恵まれ居ると云へよう。北アルプスが先づ西北の卓越風に襲はれ、次に八ヶ嶽連峰、其の次に見舞はれるのが此の秩父アルプスと云つた順序で、従つて雪量も其の順序に従て、漸次少くなる。面白い事には朝日岳の北尾根は此地方の天氣の分水界とも見られ、朝日岳以西が曇つてゐる時でも、以東の國師嶽、甲武信連峰が晴れてゐる如き事がよくあつた。

夜谷の上流より下流に向つて靜かな風が吹き下すときは概して天氣が悪くなる様だ。

廿九日曇天小吹雪の時、登高したのは如何に捨鉢な氣分とは云へ無策の甚しきものであつた。部分的には國師嶽は三者の中最も秀れたスキー登降路を有し、コース全長と垂直登高度の關係が最もよきコンヂヨンにあるものと思はれる。次が朝日岳、金峰山は最悪なるものであつた。A B C D線が最も好調のものであつた。金峰山へは寧ろ晴天ならば早朝東俣のQなる營林署小屋を發し、C'點に出で尾根縱走をするが策を得たるものでは無からうかと思ふ。圖上の黒實線は豫定線なるも、此地方の此の季節に於ては、自由なるスキーローテは殆んど探るに由なき状態である。圖のαβγδ線の如きも、現地に行つて見て啞然たる許りで狭き急斜の夏路をたどるの止むなきに到るであらう。W'間に四時間βγδ間に三時間半と云ふ、法外な時間を費してゐる。一時間掛つて百米が百七八十米の登高度しか得られぬ。

概觀するに東俣を境として之より西部の地域は山勢窮迫し、屈曲甚だしく、國師嶽北方の主尾根は、朝日、金峰の夫れに比れば、山勢大分温かなるものがある。特に西俣の如きは地圖上に見るも河身屈曲し、山勢の急峻なるをうかがうに足る。事實A P Q B' B' C'を境として夫以東の地と以西の地とに於て格段の差があるのは、何か地質上の由來がある事と察せられる。又此の地方の如き積雪少き地に於て、唐檜等の常綠樹が密生して、枝を交へ爲めに僅か許りの降雪は、枝上に支へられて地面に落下せず、其の儘日光の照射を受けて融解してしまふために、雪のむらの多いこと甚しい。濕氣少き乾粉雪のためアザラシの皮は餘程、幅廣のものでなければ用を爲さぬ。又アザラシの二枚位は磨り切る覺悟で行かなければならぬ。此の地方の狩獵業者と雖も冬期山歩きするを嫌ひ、容易に案内者を得られざる事、梓山には冬山に出る狩師二三人

居ると聞いて、其の一人の斗一爺（五十歳位若い時分カモシカを狩り歩いた事）に會つて見たが何れも、冬山に對して怖れを抱いて居り、輪カンヂキの備ある家が部落に一二軒だと聞いて、山家に似合はぬものと驚いた。土地の旅館業にしても一般に、冬期登山者に對しては未だ熱意が無い様だ。大いに啓發する必要があると思ふ。

四、紀 行

十二月廿五日 深更眼を醒ます。時計が止つてゐて時刻が、わからぬので困る。外は嚴寒の粉雪。研硝子の窓より、光漏れて、庭の枝上の雪をすかして何となくゆかしい。何だか正月の様な氣がする。角の文房具屋の窓硝子越しに時計を見て始めて、午前三時十分と知つた。朝飯をやり、五時三十分家を出る。今日は一日の中に、川上村の川端下まで行かねばならぬ。須坂驛にて、六時十四分の上り電車を待つ。電車に乗り合はした見知らぬ青年が、「氣を付けて」と注意をして呉れた。かたじけなし。長野で電車を捨て、信越線の上りに乗るに少し時間があつたのでフィルムバックを買ひに出る。七時二十五分の上野行の汽車の人となる。九時三十分小諸にて佐久鐵道に乗り換ふ。大湊要港部に居たと云ふ水兵が、スキ一の事をよく知つてゐて、蠟の事等話し合ひ乍ら退屈を紛らす。羽黒下で水兵下車。午前十一時終點小海下車。之より先二里、海の口まで乗合自動車で行く。道の兩側に、二日許り前に積つた粉雪四五寸。佐久としては雪の多い方だ。此の分では餘程あると思つて喜ぶ。十二時海の口着、晝飯を食ひ、荷物、スキーを川上に通ふ運送馬車に託して、輕装して野邊山ヶ原に掛る。今日は之れから、更に六里の道を作らなければならぬ。路は凍結して、上面が僅か融けて、泥がつるつるして歩き難い。廣漠の野邊山ヶ原、唐松の林が低く遠くまで延びてゐる。此の世の立ち始まりの姿が未だ、破壊されずに残つてゐる。金峰山瑞牆山が原の果に立つてゐる、金峰の峯は眞白だ。四五尺はあるらしい。

眼前に男山が雪も付けずにそばだつ。八ヶ嶽の連脈は頭を隠して、中腹以下の豪快な山膚を、黒々と、裾野は廣く、幾つもの尾根が走り降りて、其の先端は、扇狀に切り取られて緩い傾斜面を、形造つてゐる。野邊山ヶ原、念場ヶ原、六里

が原等廣袤數里の原を構へて他の山とは又別な威容を以て嚴然迫つてゐる。其の大きな起伏のある峰頭を見せぬ所に尙凄
みがある。遙かなる原には、低き柴草、唐松の疎林、果てしなく續き、四寸許りの積雪消えもせて、地表を淨く覆ひかく
し、日は冷く照らして、野末の風は寒い。我が心に、エトーヴァスが影を寫したのか、エトーヴァスのうちに我が心が見
出されたのか。

道端の柴根に腰下して、リュックの中からくしゃくしゃになつた、カステラを出して嚙る。尾根の數と地圖の上の谷
や尾根を見つめて、其の山濤と谷々に、心吸はれ行く。

長く續く野中の泥濘の路を呑氣に、又物憂さげに通ふ村人。洋服を着た人等、其の中には小學校の先生、村役場の人、
請負師等とおほしき數々を見た。自轉車を引つた者は泥路で弱つてゐる。蠶振り立てて、苦しがつて歩く馬を追ひ立て
る馬子。夫等が二十分間に一人位の割で、此の廣野原の唯中で行遭ふので、其時ばかりは此の惜しき單調は破られて此の
先に人里のあるに想到る。午後二時四十分、袖添川を渡つて愈々川上の盆地に入る。樋澤、御所平、原、小さな部落が次
々に展開する。原の小學校の廣莊なものには驚いた。木材の豊富な此の村には製材會社の大きいのがある。御所平、原は川
上の中心地と云つた所で小さき店、足袋屋、歳越の鮭賣る肴屋、障子に旅人宿と書いた簡易な宿屋、喇叭の付いた古い蓄
音機を一つの誇りとする呉服屋兼雜貨店、床屋、自轉車屋、夫等が如何にも山里らしさを壞さないで、武陵桃源の此の境
のアトモスフィアを形づくつてゐる。曾ては物淋しき寒村を想ひ浮べた眼には今此の開明に向ひつつある山里を見て一
種の愕きと或る淡い失望を感じずには居られなかつた。

雪は少いが路はかんかに凍つて乾いて砂塵が立つてゐる。スキー靴の踵が壞れはしないかと氣がかつて歩いたので足
裏が赤くすれて痛む。後を振り返れば八ヶ嶽を隠した雲を夕陽が透して薄桃色に映えて、雲の下層に、野邊山ヶ原の雪が光
つて見える。大深山の村を過ぎ、寒い河原に添ふた田圃道を行くと居倉の部落がある。其の昔弘法大師が此の村を過ぎり
飲水を乞ふた所、心なき老婆が之れを斷つて以來、毎年之の村に冬になると水が出ぬとの事、同じ千曲川筋の之れより上

流の秋山、梓山川端下、何れも水に不自由せぬが此の部落許りが水が涸れると云ふ、何か地質的に原因してゐると思ふがそれにしても此の傳説が面白い。屋根の上には何れも一樣に石を載せて置く。再び千曲川の左岸に渡り川端下川に架した橋の袂の金峰旅館に、後から到着する荷物の事を頼んで、右の岐れ路に入る。ガクガクに凍つた雪と泥の路を、陽は落ちて暗い寒さに包まれ乍ら歩を運ぶ。星は空に凍て付いてゐる。火影さへ見えぬ、靜謐の好きな、山と談る事に自負する自分も、始めて只我一人のみと強くしみじみ感ぜしめられた。一段と濃い寂しみが襲つて來たためでもあらうか。足はふらふらして來た。雪の上にサツクを下して、密柑一つ食ふ。四五丁行くと一點の火が、闇の梢を透してほの見えて來た。路は谷に下りて少しはよくなつて來た。川端下新田の火だ。歌が出て來た。淋しみの醍醐味もさる事乍ら、人は矢張り目が欲しい、火がほしい。雪の野中に獨り居る時、特にさう思つた。新田の林董氏宅に泊めて貰ふ。董氏は林巽君の弟で川端下から此處へ分家に出たのださうだ。巽氏は所用で今日小海の方へ出たとの事。そばまんぢゅうをして貰つて食つた。

十二月廿六日朝七時起床。昨日の疲れでつい朝寝をしてしまつた。空はかんかんに晴れて凍つて外は攝氏零下九度、下駄をはいて川に顔を洗ひに出ると雪を踏む下駄がきしきしと鳴る。董君に金峰旅館まで昨日の荷を取りに行つて貰ふ。此所から谷奥を眺めた景色は友の山中君から貰つた秋の川端下谷の寫眞を思ひ較べて感深い。今日は東俣の製材小屋までの豫定。御婆様に案内されて川端下の、林巽氏宅へ出掛ける。此家は此の部落の顔役で、寒村の物資配給所の様な所、罐詰雜貨等を賣つてゐる。十時董氏荷物を持つて來た。此の家の三つになる男の子がとても頑丈で、豪膽さうだつた。何だか行末、山男にでもなつて、年老ひた自分が再び此の山村を訪ねる時、案内でもして呉れさうな氣がしてならなかつた。其の弟の一つの子は蒼白くて、人を見れば怖れて泣いてゐた。二つの異なる運命付けられた者を眼のあたり、まざまざと見せらるる様な氣がした。十時半家の人等に首途を送られて出た。川端下の出はづれ、西俣と東俣との出合に來ると、金峰の峰が見える。眞白に雪を被つてゐる。國師は非常にグルミーだ、樹林が山巔まで覆ひかぶさつてゐる。空には一點の雲も無い、眞に晴々しい日和だ。

十一時半、製材小屋着。人夫等は仕事を仕舞つて今日下山すべく夫々衣具蒲團、炊具を橇に付けて準備の最中だつた。米、味噌を分けて貰ひ、此所より四丁許り下流の製材事務所に蒲團、炊具があるので其處を借りる事にした。圖のQ點は白田營林寮の小屋で設備完全、Pが前に到着の製材小屋、A點が事務所。製材小屋附近は積雪一尺許りだが山奥のため寒氣強く製材の水車が凍つて廻らない。取り散らした材木の上に雪が冷くかぶつてゐる。林には荷を持つてAまで下つて夕食をして待つて居て貰ふ事にして、自分だけ晝飯してレモンシロツブの水筒と若干の食物と、防寒具を携へて、スキーに海豹皮を付け、樹海に覆はれた山を登る。(以後實地踏査の國師ヶ岳の部と重複する故省く。)

午後五時國師ヶ岳より歸着。爐には赤々と粗朶が燃え、温い汁がかゝつてゐる。濡れた着物を脱いで、着代へ、ボツリくくとカステラをかぢる。六時頃飯が出来た。持參の鰹の鹽辛が馬鹿にうまい。星はまたゝいてゐる。北の方の山に一時雪が掛つたが八時頃晴れた。星が輝き出し外を歩くと、雪がきしきしと鳴る。川の音許り耳に入る。氣温は五時半頃 2°C 六時 0°C 八時 1°C

十二月廿七日(第二章踏査の稿参照)

午後三時半朝日岳より歸還。小屋に入つて火にあたつてゐたら、雨が降つて來た。山は雪だらう。明日は一日休養と決めると何だか緊張がとけた氣分になる。夜に入つて雪にかはる。明後廿九日は天氣ならば金峰山をやる心算、明日は一寸動いて根據地を西俣に移すだけであとは休みと豫定する。午後十時、安易な氣持で就寢、氣がゆるんだ故爲か色々な夢を見乍ら眠る。

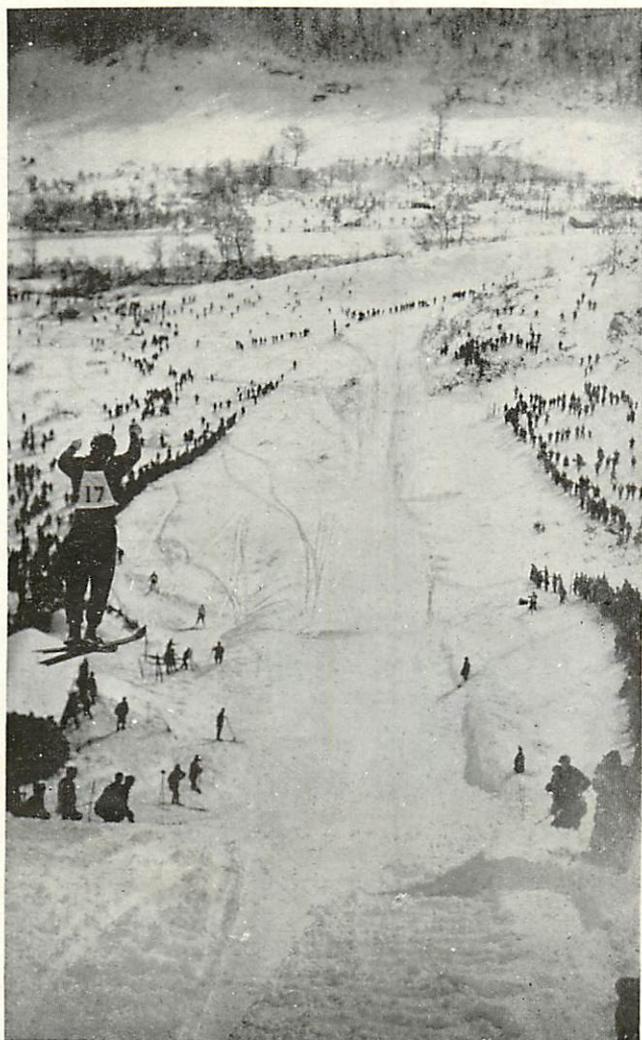
十二月廿八日。外は一面の霧、明日は何だか晴れさうだ。ゆつくり朝食をやり、ゆつくり跡形付けして、午前九時半小屋を閉めて西俣に向ふ。雪は薄く道を被つたが二三寸でスキーには不充分、廻り目を過ぎ午前十一時、西俣の山田と云ふ者の炭燒小屋に到着、泊めて貰ふ事にする。林董は川端下まで食料副食物の若干を取りに下つた。明日も矢張り單獨行なので、明日の行を考へて、地圖と首引きして色々な事を想像して、火にあたり乍ら緊張の一日を過ごす。對岸も此方側も

何れも山は近く、谷に迫つて、突端が岩峯や岩壁になつてゐる。山ひだの有様が東俣とは大分趣を異にしてゐる。屋根岩の突端の裏面が物凄く、小さな数多いギャップを刻み込んでゐる。午後三時雪になつた。明日はどうも怪しい。細い低温の雪は音なく積る。金峰の奥への澤は暗い。朝日岳の北の二四二〇米の三角點の峰が此所からもよく見え、其の附近はベツトリと雪を付けてゐる。其處を去來する雲の蔭を追うて一喜し一憂する。三時炭焼連擲の少年少女等三人、村へ下る。林董にも歸つて貰ひ小屋の主人山田銀藏氏に炊事をして貰ふ。西俣が直ぐ前を流れてゐる此の小屋の位置は東俣と西俣との分岐から二軒許り小徑が西俣を南岸に渡らうとする橋の袂にある。小屋は方丈、屋根が低く垂れてゐて、主人の小屋を想はせる様に、原始的で山らしい。二間許り川底へ下ると、材木のセガで屋根を葺いた風呂がある。川水を汲み入れて沸かす。薪は富饒、水は清冽、炭焼同業の人夫等二三人小屋へ來て焚火にあたり乍らボツリ／＼話したす言葉は荒いが、山の人には淳情が溢れてゐる。雪は降りしきる一方、明日が氣掛りでよく睡れぬ。

十二月廿九日(第二章踏査金峰山の所参照)

十二月卅日。前夜の半ばから望みを囁してゐた天氣も絶望らしくなり、九尋の功を一簣に欠いた昨日の雪辱をせんとの念慮も此の天氣ではどうやら怪しくなり、それに小屋の主人も今日は晝頃里へ下ると聞いて萬事都合が悪いので、自分も此の西俣の根據地を引き拂ふ。九時四十分小屋發。一切を背負込んで三日間降り續いた雪の道を滑降する。荷が重いのでスキーは、ひどくもぐりあまり走らぬ。十時川端下林巽氏宅に寄り、厚誼を謝す。巽氏は今朝の雪に喜んで、狩に出掛けられたさうだ。年取の餅搗きで、餅の馳走にあふ。辭去し新田の林董氏宅へも寄り別れを告げて甲武信をやるべく梓山に向ふ。川端下の西の山隈の半圓形の谷がスキーに非常によい様だ。數十町歩に亘る六十三銀行の所有林の中を通る路を抜けて午前十一時五十分梓山着。白木屋旅館にて山行きの人夫を心當り探がして貰つたが何れも年末で忙しくて出られぬとの事、それに山里にも似合はず、雪を怖れて居り輪カンデキなるものゝ備ある家を聞かぬ、旅館の人も割合に冷淡であつた。斗一爺に遭つて山の様子を尋ねたが甲武信直下の小屋まで四里半程あつて途中何も他に小屋が無いとの事、併し一人

では此の荷を背負つて今日夕暮れまで其處へは可成りの強行だ。天氣は意地の悪いものでこんな中途半端な日に限つて又晴れて来た、今日か明日昇らなければ機會は又來ない。人夫の都合を待つて二日か三日迄延す事は時日が許さぬ、それに甲武信嶽のシーゲレンデとしての價値も、前三者と大同小異らしいので一人で頑張つて昇る張合も抜けすつかり悄氣けて、歸る事に決める。海の前まで荷擔を頼まうと思つたが矢張人が無い。まゝよ頑張れでゴツ／＼歩き出す。朝日岳より西が曇つて以東は拭つた様な晴天。天を恨み乍ら平凡な廣い人道を重い荷を負つて歩く。子供等が珍しがつてスキーを眼をみはる。一時半秋山を過ぎ居倉に掛る。金峰館の息子に荷物を自轉車で御所平まで運んで貰ふ、空身になつて、スキーだけ引張つて平坦な道を急ぐ。後を振り返れば五郎山の怪偉な姿が此の孤獨の敗退者を送つてゐる。彼の熱い胸には自己を訪ふものに對する深き同情の涙に充ち溢れてゐるのであらう。居倉、大深山の間の田圃道で川の南岸の奥深く、廣き扇狀の高原がたなびいた雲の下からのぞいてゐた。小川山の西北谷のゲレンデであらう。もう數年の内には彼處にも若きシリロイフェルの跳躍する姿を見るであらう。大深山にも旅館がある、立派な吊橋も掛つてゐる。原の雜貨店は顔馴染の村人が寄つて無駄話だか買物だかわからぬ事をしてゐる。三時半御所平着。丸正旅館に寄つて先着の荷物を受取り、又重い荷を負つて寒風に曝されつゝ、遠き路を只一人行く、樋澤も過ぎ袖添川を渡る頃、漸く日も傾き、霧は遠き野の果を立こめて、いやに寒くなり身体も疲れて來た。橋の上に腰掛け、桃籠一個をピッケルで割つて食ふ。通りすがりの御爺様鼻水垂らして魂消けた顔して、見て行つた。百米許り登つて野邊山ヶ原に出た。もうほんとに暗くなつた。黒い轡が二本、薄暗い雪明りの野に何處迄も續いてゐる。其の真中が人の通る一尺許りの。踏み付けた、汚くよごれた雪路。冬になつて路が悪くなると荷馬車は何處でも勝手に通れさうな所を無暗に通るので道は一本になつたり三本になつたり定めない。誰もが通らぬトラージンされたスキーの音のみシーシー云つて自分の後から蹤いて來る。自分が止まればスキーも止まりスキーの音もだまつてしまふ。鼻が低い森の中から聞える。晝間の中は單獨でも太陽、鳥、風凡て皆之れ我が我がが話し相手だが、夜になると諸々のもの皆睡りに就く故爲か、風も聲をひそめ、日も隠れ、鳥もねぐらに入り、一番の山までが言葉少







なになつて、あまり話し掛けて呉れぬ様だ。山と自分はお互に視る事に由て話は交はされ情は通ずるのが其の山さへ見えなくなつてしまふ。こんな時こそ始めて自分は獨りなのだなどと氣が付く。併し眞當の寂味はこの時に於て味はれる様な氣がする。晝の靜謐は未だ賑かさと活動を持つてゐる。夜の寂寞こそ眞の靜止の淋しみだ。

五時半市場に着く。家が三、四軒ある赤い燈が付いてゐる。之れから降りだ。二三日前から變調子の膝の後方の筋が痛んで、元氣よく降れぬ。毎日足を冷した爲めか、或は過勞か、それとも「シーブシクト」になつたのか。

ゆつくり降る、六時二十分海の口部落着。若者のハーモニカの聲が寒い雪の上を流れて来る。戸毎から漏れる暗い光が街路をさしてゐる。自動車の發着所に來て見ると今しも最終の自動車が出る所。危い所で取り残される所だつた。之れに乗り外したら此の海の口に宿らねばならぬ、でも數升の石油のために余と荷物と二三の乗客と重い車体は數十分で二里餘の道を運んで呉れる。山から出た時いつも有難く思ふものは文明の利器の恩恵だ。

七時十分小海着。次の八時三十分の汽車まで待つ驛前で夕飯を食ひ温い炬燵にあたりぬくもる。八時三十分の汽車が發つ。客車内は火鉢が出てゐる。サツクから皮を出して横になつてまどろむ。十時二十分小諸にて信越線に乗り換へ。大屋の驛と坂城の驛で少し氣が付いた切りあとは大方睡り續けて通る。十一時頃篠の井下車歸宅。(終り)

冬季十勝岳の思出

大 戸 健 一

先年吾々四名が十勝岳に於けるアクシデント而かも今になつて考へてみればかなりにつまらないやうな事も多くあるやうに思はれる。併し此の稿を讀まるゝ方に而かも此の拙なる文を讀まれてこれから冬季登山をなさる方には幾分なりとも参考になる事が出来るなれば自分は此の稿を書いた責任を果し得たとも言ひたいやうに思はれる。思へば二年の昔だ、随分と忘れたやうな所もある。

一行 安積樟三、鴨下克巳、前川保夫、大戸健一

當日の吾々の所持品は

シユタイグアイゼン(各自)、スキー滑止アザラシ皮(各自)
ピツケル一、バロメーター一、ラテルネ一、ローソク一箱
輪螺一、寒暖計一、スキー修繕具一組、雪眼鏡(各自)、寫
眞器三、地圖(陸測五萬分一十勝岳附近全部)、磁石(各自)
小刀、細引、着換、シャツ類、スエーター、襟卷(各自)以
上の所持品中の(私が思ふに)バロメーターは今まで自分

は夏冬季の登山にも携帶したことはなかつたが此の時初め
て使用して非常に役立つたことである。

食料としては

辨當各自一食分、フランスパン二個、牛酪若干、乾芋若干
コンドビーフ一罐、ミルク一罐、カタパン若干、魔法壘三
本。

記事 一月二十二日

昨日の美珠岳の吾々四名の初登攀は随分と苦るしいもの

であつた。併しあれ丈の苦痛によく耐へて登ることが出来た故今日の十勝岳登山位は今日一日の行程としては樂なものに違ひなかつた。征服慾とでも言はうか意氣の盛んな吾々には年々夏冬登山回数が増加してゆく、十勝岳を登る位はいつも容易なものであると思ふて居た。

八時三〇分吹上温泉の人々より懇ろに見送られ吾々はアザラシ皮をスキーに附け直ちに履き足並揃へて元氣よく出發した。森を通り直ちに硫黄山下の泥流へと向ふ。森林の中は少しの風はあつた、勿論昨日の美瑛岳の山陵で吹きまくられた風とは比較にならぬ。森林帯の切れ目まで來て此處より泥流へと下る、やはり泥流に出ると林の中より風は強い、何の障害もない冷めたい風は縦横に吹いて邊りの樹々の梢を鳴らす音も一層すさまじい、大雪山の連峰は無論見えない。下は十勝平原も頭上の硫黄山の噴煙も濃い霧のために見る事も出来ない。向ふ側の泥流に荒された跡に残る枯木が霧の中に見たりかくれたりする。泥流に一旦降りそれより登りとなる。その時に第二番目に居た鴨下の右のスキーのアザラシの紐が切れた、安積は助けて二人で修繕する(併し此の時の紐は切れてから用ひらるゝことか出

來ず遂にスキーデボットまで頑張つたことは猛烈なアルバイトであつたに違ひない)冷めたい風は總ての方向から吹いて來るやうに思はれた。前川と自分は二人を後に少し宛步調を緩めて登つてゆく。急な斜面になつて來る、雪面の堅いためにスキーが横に這つて登り難くなつて來る。吹きまくる風はとても面にうけることは出来ない。

急な斜面を凡そ四十分程も登つた、登るにつれて風と霧との激しさはますます加はつて來る、斜面は急なためにアザラシよりもむしろスキーのエツヂに依つて登つてゆくやうなものであつた、千五百米附近にいた時は十時も三分は過ぎて居たやうであつた。

やうやく硫黄山の左肩、十勝岳より西北に走る尾根の下まで取りつく事が出來た。噴氣孔のかすかに隠見するのを右に見一七〇〇米附近に着いたのは十一時十七分であつた(バロメーターは一七八〇米を示す)濃霧を含んだ激しい風は岩角に當つて飄々と鳴る。前川はバロメーターに依つてしきりに天候を診察して居る。併しこの時にこの天候を侵かして登つたのは無理であつたと思ふ、自分に少しでも無理と思ふたら止した方がよいと思ふ。殊に体の具合の悪

いやうな時はテルモスの暖かい茶を各自飲んだ、こんな寒い時に暖かいものを口にするこの出来るのはテルモスより外にない。後一息だ、スキーデボットの目印しとして赤布を立てたスキーに結びつけて四人は用意のシユタイグアイゼンに履き換へ凍りついた急傾面を登つて尾根についた。時々風の吹き廻はして自分は噴氣孔よりの硫煙のために咽せかへつた、所々凍りついた雪面が青い色をした氷の面と變りシユタイグアイゼンの刃の履む音が物凄い風の音に混つてかすかに聞こえる。吾々は只管頂上へと急いだ。尾根の上の風は一層猛烈なものであつた、時々風の横吹きのために身の安定を失なふ事さへあつた。廣漠とした尾根も濃霧に鎖されて眼前一間位になると見えない。十勝岳の頂上の眞下までは十五六分（スキーデボットから）で行つたやうに思はれる、この頂上までの急傾斜を一息で登ればよいのだ、而かも吾々は一刻として止まる事は出来ない、登るにつれて風は益々激しくなる、帽子の垂れで顔を包みその上に襟巻を巻いてもそれを透すやうな風は冷たいのを越して痛みを覚える。（此のやうな烈風の時は防水服のやうなものゝが案外役立つように思はる）表面の堅くなつた鼻先

のつかへるやうな急斜面を四人は濃霧と風とにおびやかされ乍ら登つた（自分は此の時風のために吹き倒ほされて地に腹這ひになつた）先頭の安積が氷の櫓に依り手を振つてるのがほんやり見える、遂に頂きに着いたのだ、お互ひに「ベルクハイル」を交はした。風は何物も吹き飛ばす勢、併し此の自然の偉力を侵かして来たお互ひは白く凍ほつた顔の中にも力ある喜びであつた、時は十一時五十分頂上の標高は二〇七七米（バロメーターは二一〇米、氣壓は五八〇耗の低氣壓を表示して居る）ほんの僅かの間氷の櫓の間に身をよせたに過ぎない、直ちに下降する事とする。正午十二時、風と又一しきり戦ひながら今来たコースを降る、併し登る時に来た足跡はなく濃霧の中を僅か先の見事の出來るのを頼りに降るのだから自然と方向が變る、しばらく降る中に夏期の登山休憩小屋のある所に來た、併し小屋は厚さ一米以上の氷に覆はれてゐる、中に入つて休むなどと言ふことは無論出来ない、時は十二時二十五分であつた、こゝで僅かの間垂れ下つた氷の間に身を倚せて休む併し猛烈な風は奔浪して氷の下に居て身を隠す様にしても顔を擧げることすら出来ない、お互に顔を合はせて相談す

る事もかなりの困難な仕様であつた。用意のビスケツト三切片程を口の中に頬張り後は顔を手で覆ふてゐるのだ、顔を見あはせて白くなつた所を摩擦し合ふ。地圖と磁石を出して方向を定める（此の時にビツケルを持つて居たゝめにその金具が磁石のその働きをなくしたのではあるまいかと思ふ、で此の點はよく注意すべきことと思ふ）仲々方向は定まらない、やうやくに方向を定めて動く、併し前の來た時の地理とは違ふやうに思はれる。つい歩いてると目の下に崖がある、きつとカミホコカメトツクの尾根の方に歩いたやうに思はれてこんな筈はないと又戻る。幾度も磁石を出してその示す方向を辿つて見た、依然として判らぬ。一瞬間でよいからこの風と霧が晴れて附近の地勢を見る事が出来ることならと思ふ。仕方なく確實に方向を定めやうと又登山小屋まで戻る、漸やくにして小屋に戻る。お互ひの顔は眉毛も睫毛も白く凍りついて目を開けるのも苦しい。兩頬、兩顎も白くなる、眼鏡をかけて居る人は事に注意すべきことと思ふ、この四名の中で眼鏡をかけて居たのは自分獨り、金屬が皮膚に觸れて居る所、鼻の出頭や、顴顚の下の所は事實他の各所よりも凍傷を早めるやうに思はれた

のである、それは後になつて氣がついた、事にその箇所の凍傷が他の所に比して激しかつので、一つの相談事をするのに仲々手数がかゝる。一吹き風の風のためにはすべての事を中止してその風を防がねばならないから、時は三時頃頂上を出てから三時間以上の放浪であつたのが自分には三十分位しか経たやうにしか思はれなかつた。再び方向を定めて小屋を出た、一間位先は見えないのだからやはり變な所を歩いてゐる。自分等は一体何處に在るのか又此處が何の邊の個所であるか更に判明し得る事が出来ぬやうになるそれで三時三十分まで探ねて若しそれ以上判らぬ時はスキーデポツトを斷念して此の寒い地帯から低い氣温の暖かい所に降る事とする。併し三時間以前に通つた足跡而かも僅か六本か八本か位の鐵の釘のやうな跡は氷面で發見しやうとしてもこれは無理な事に違ひなかつた、所々に風の具合で吹き溜りのやうなものもあつた。お互はなるべく離散せぬ様に注意しながら降つた、それで吾々の降つた所は西方を指して降る、そしてその澤を降る事に依つて行けるのは吾々の今朝出發した吹上温泉より雨に當る舊翁温泉の跡に出られると思ふて居た、（併しこれが全然反對の方向なのであ

つた、十勝岳の北方美珠川の方に降つて居たのであつた、美珠岳より南西の澤に降るにつれて風は静かになつたやうであり濃霧も晴れて来たやうである。併し雪は腰の邊まで没するやうになつて来る、追々と邊りは暗くなつて来て足もとが判らない、意外な所につまづいて時間を取る、勞力を費やす、お互に元氣を出し合ひながら雪の中を遊ぶやうに降る。今夜は遂に温泉に歸へる事が出来ないから適當な場所を求めて其處に休み一夜を明かす事に合議した。漸やくにして邊りの平らな面かも灌木のある所に出た、バロメーターは一二三〇米で氣壓は六五〇耗時は五時三十分頃であつた。邊りは眞暗である、風も濃霧も晴れたが空はどんより曇つて居るやうだ、此の平らな所のすぐ側らは少し落ち込んで澤になつて居るらしい、暗くあるのでよくこの邊の地理は判らないが東の方に高く一つ大きな尾根が黒く横はつてるのがかすかに判る、それを越えると大抵硫黄山の舊鐵索のある尾根には直ぐらしい（實はこれが誤りであつたのだ）此の附近には翁温泉跡もあると思つて居た。用意のラテルネに火をつけてピッケルに懸ける、小さな光が淋しく雪の上を照らす、氣温はマイナスC十六度、もう

お互は身心共に疲れ切つたがさりとて眠る譯にも行かない。暖を取るのに火を焚く必要のあるため各自手わけをして焚木を取りに歩く、やゝもすると胸の邊りまで埋り相になる、せめて此の時鉞のやうなものがあれば容易にとつき焚木を集めることも出来るが刃物とては小さな登山用のナイフのみ細い枝を折るに中々に手数がかゝる、徑一寸位の枝を取るには容易なものではない、苦心に苦心を重ねて火を焚きつける。必要のない紙屑、十勝岳以外の地圖握り飯を包んだ紙類も皆焚付けの材料としてしまつた。夜も更けて來ると冷えて來る、雪はちら／＼と降つて居る。遙かに遠く富良野の邊りの町の燈がかすかに見える、あの光のある町には人も家畜も皆暖かい眠りに落ちて居るのだ、まどらかな夢をさへ見ているものもあらう。吾々は目的の山に登ることが出来たとは言へ歸途の物凄しい自然の偉力に弄ばれて今はその暖かい眠りすら取る事が出来ない、一分たりともまどろむことさへ出来ない身なのだ、体ことに足が冷たくなると足履みをしながら歌を歌ふ、空腹と寒氣を覺えるので小さな火に暖まると甘い寐りに誘はれて來る。最前澤を降る途中にピッケルで開けたミルク罐の残りを交代

に舐め合ふ、牛酪を舐め合ふ。

明くれば二十三日夜半十二時に於ける気温は0 マイナス十九度、あと六時間の我慢だ（吾々は皆シタイグアイゼンは着けたまゝで居た、此の時は氣が付かなかつたのだ、これは探索隊に合ふまでに着けて居たので足の凍傷を一層早めたのかも知れぬ、殊に冬季登山に於てアイゼンはなるべく靴に合ふやうに附けるから随分に冷めたさを覺えるし又立ち止まつたりすると餘程冷めなくなるやうに思はれる、それを別に念頭にもおかすにすゝとつけて居た）火の燃えるのを見つめて居ると身も心も甘い夢の中に行つて行き相になる、なるべくお互ひに話し合ふ、歌を歌ふ、何處かでサイレンのやうな音が流れて來るので吾々を探すためのであるまいかと四名は聲を揃へて叫ぶ、耳をすましても後は木魂する丈で靜寂に歸へつてしまふ。（此のやうなことは六時半に出發するまで三四回あつた）火を雪の上に焚くのであるから雪は解けて身長以上の深きになり四人は樂に入れる穴が出来て、火の燃えてる所まで二つ程の階段を作りそれに交代に腰をかけてあたる事が出來た。四時頃に朝食（前夜は十時すぎに一つは握り飯を食ふた）をする、出

してみると堅くて齒が立たない、山ナイフを突きさして割らうとするがさゝらない、前夜もやはりさうであつた、仕方なしに火の中に入れて焼いて眞黒になつた所をくると黒い皮を剥ぐと又中は堅い、それで一つの握り飯の表面を眞黒な皮にして焼きそれを剥いで食ひ又焼く、凍つた握り飯の黒焼きだ、炭を食ふのと同じ味だと思つた。ねむくなると焚木を取りに出かける、小さな枝を取るにも骨が折れる、小さな木片に力を入れすぎて雪の中に倒ほされる。夜明けの寒さは又格別なものであつた。眠りと疲れのためであるのか歌を唄ふ聲も次第にかすかになつて行く、話の數も少なくなつて來る只眠いのみが慕はしい。五時すぎになつてやうやく邊りが薄明るになつて來た吾々の居る所は凹んだ所であり又空はどす黒い空色でおまけに雪が降つて來た、もうその東北方にある尾根を一つ越せば硫黄山の舊鐵索の尾根に出来る事が出来るのだ、時間もあるので尾根へ出たら出来る事なら昨日のスキーデボットまで行つてスキーを取り元氣よく温泉まで歸へらうとさへ定めた。六時三十分頃に漸く邊りの景色が判るやうになつて來た、併し空はどんより曇つてます／＼大粒の雪が降つて來た。出發する

時に方々から出来るだけ焚木を集めて今まで邊りを散らしたものを片付けて最後の盛んな焚火をして暖を取り出發しやうと四人が交る交る火吹き達磨になつて盡したが燃え相になつた火は遂に燃えてくれなかつた。なんとなく残り惜しい氣がした、四名のものは此の所を去つてとほく、と歩き出した。雪が深いので歩き難い、時々磁石を出し地圖を擴ろけて見たりした。雪は降りしきるので邊りはほんやりして居る、目指す鐵索の尾根に出るべきその一つ前の尾根は中々に薄明りで見た時よりは遠い、その尾根はずつと伸びて北方即ち吾々の左側にあり吾々の居所とその間には大きな澤が入つて居る。小さな澤を一つ越える、なるべく等高線に歩くやうにした。雪は腰の邊まで埋るのではやる心に比して進みは遅い、時々アイゼンが木やその他のものに引つかゝつて思はぬ時間や勞苦も取る。やうやくに澤を越へ山腹をまいて行くと目指す尾根へ出るには一度大きな澤を降りなければならぬ。空腹はます／＼激しくなる、僅か歩いては休む、併しどうしても降らなければならぬ、傾斜は六十度位もあつた。轉がるやうに或ひは遊ぶやうにして澤まで降りた、それからあの尾根まで一昇りである、併し

その昇りも先の下りに劣らぬ急傾斜で木の枝に頼りながら交代々々のラッセルで進む、中々に果取らない雪の深いためある所では何時までしても同じ所を足踏みをして昇るのにもがいてなければならぬのだ、僅かのアルバイトにすら全身は汗みどろにならなければならぬ、幾度か休みながらかなりの永い時間を費してとう／＼尾根まで辿りつく事は出来たものゝかなりの廣い尾根らしい。相變らず雪は腰の邊まで埋まる、中々最高部の見透しの効く所まで行くには遠い、此の時鴨下はリュックサククに着けて居た輪螺を附けて歩き出したが間もなく取つてしまつた、聞くと輪螺を付けると足に力が入つて歩くのに骨が折れへバツテ駄目だと言ふので自分が是れをつける事とした。尾根の最高部まで来たものゝ見透しは効かず鐵索の尾根らしいものは見當らない、又向ふに一つ吾々の立つてる尾根よりも僅かな高かさの尾根がある、あれに違ひないあれを越せば鐵索の屋根なんだと言ふ、向ふの尾根に越すにはやはり深い澤が横たはりかなりの距りなのだ。空腹のためか睡眠不足のためか又は疲勞のためか目がかすんで来る、(これは四名とも目がかすんで来たのであつた)併し吾々にはそれからしばらく

くの永い時間を費やし努力を費やして又澤に降り、急傾斜を昇つて目的とする尾根に着いた時は吾々の期待は全く裏切られた。又向ふに同じやうな尾根が遙かに彼方まで起伏して居るではないか、その間の大小の澤なども思ひやられる、到底望みが無さ相だ。しばらくは吾々は雪の中に坐し或ひは立ちして唯々沈黙するのみであつた。雪は段々と小止みになつて來た、時折透りの静けさを破つて梢より落つるのは雪の音のみであつた。こうして止まつて居ると猛烈なアルバイトのために心よい甘い睡りが來る。休んでは思ひ出したやうに煙草をくすぶらし又雪を甜める（此の時は悪いことゝは知りながら僅かの勞苦のためにも全身は汗みどろとなり渴を覺えるので雪を食ふ、そのためか口中は荒れてひどいめにあふた）煙草の火をつけ合ふ動きすら今は容易な事でない、獨りが轉らんとてそれを起すさへ中々に太儀なことでもポケットより地圖を出すのも時計を見るのさへ嫌になる、只眞白な雪を見つめて居るとすぐに目は閉ざされて全身は小春日和のやうな暖かさに包まれて無我の境になる。昨日一昨日のあの物凄い風霧を侵かして急傾斜の氷の面をシタイグアイゼンでステップ切りながら登攀せ

る時の勇氣と今時の自分達の場所すらも判明せぬなき雪の山谷の放浪とを考へるとほんとうに情なくなる。最早食するものは何もなくなつてしまつた、只鴨下のリュックサツクに煙草があるのみである、此の調子なればきつと今夜も又雪の中で夜通しをしなければなるまい。何糞！今夜位だつてと元氣はあるものゝこゝなれば命の問題にまでなりはしまいかと思ふ。吾々の凍傷は又思ひ設けぬ程度まで進んで來る事であらう、お互ひに元氣なことは言ふものゝ併しどうする事も出来ない、お互ひに元氣で強く行かうとは時折交はずものゝその返答も腹の底から出る精一杯の低い聲であつた。

最う正午も過ぎたやうだ、依然として方角は判らない、只幸な事には此の尾根の盡きた果の十勝平原が段々と晴れ上つて來た、雪も止んだ、追々と晴れ上つて來た、吾々は美瑛岳より西地方に走る尾根と美瑛川の支流（オヤウスナヒ瀧との交點一一四〇米の邊より東方附近）を歩いて居たのに氣がついた。吾々は西の方に進むべき進路を東北方に取つてた一大誤りであつたのだ、時は二時頃であつたやうに思はれる。吾々を昨日梢に風を鳴らして送つてくれた十

勝岳麓の温泉のある森林は遙るか西に當つて彼方に見ゆる最早吾々の行くべき進路は定まつた。(相變らずシユタイグアイゼン附けたまゝで此の雪中を歩くのだ、此の時も別に足の方にはあまり氣が附かなかつた、又アイゼンは急な斜面の雪の中を行くときに自分は利とする所もないではないやうにも感じた) 心は逸やるものゝ足は中々に進まない、

五六歩を歩むと雪の中に倒はれる、あの目的の森までは今日中には着けるかどうも怪しまれる。雪の中に倒れて居る時間が歩く時間より多い、行手に達するには澤、尾根、澤とが交互に重覆して居る。見上れば美珠岳は青空に白い頂を見せて居る、その山腹も今日風の吹かぬものと見えて雪煙り一つ立たない、なんとと言ふ静かな景色であらう、山は一つも汚點のない白い姿だ、しばらくは四人共その景色に見惚れてる、自分は輪螺を履いてるので先になつて進む、輪螺の紐の緩るんだのも締めなほすには手数がかゝる、雪の中を引き廻はす様にして歩く、兩足のズボンには雪が氷のやうになつて附いて堅く皮膚に當つて傷みを感じる、大部美珠岳の西南の尾根の邊りに來た時に安積が最後の食物がある、それを食はうと言ふ、それは安積が數年程以前に

リュツサツクの中に非常食糧として入れておいた干飯があるのを思ひ出したと言ふ、見れば黴の生えて一面青くなつて堅くなつたのが小さな袋に入れてある、それを一つまみ宛雪と混ぜて食ふ。

どうしても一度降りて又昇つて向ふの尾根に出なければならぬ大きな澤の所に來た、なるべく降らずに出来るなら昇るやうに行かうとした、それは高い所はあまり雪に埋まらないから、併し尾根に沿ふて迂廻するにはあまりに高さがある、仕方なく自分は轉る様にして澤に降りた、降りると綺麗な水の出る所が雪の底に見ゆるのでそこで一休みをしコップに一杯程宛水を飲んだ(後で安積、鴨下の兩人は苦しい思ひをしてこの水を戻どしたと言ふ、併しその少し前に食ふた堅い干飯は決して戻どらなかつたと) 言ふ、完全にあの堅い干飯は消化せられたのだと言ふた) 今までの諸々に散らばつて居た雲群も何時しか拭ひ去られて雪に反射する光は吾々の視神経の疲れ切つた目を射て目を開ける事も苦しい、又僅かの距離の歩行にも疲勞を覺える事が夥しい、只全身が汗だくとなつて休みたくなり休むと直ぐに眠くなつて來る、眼はかすんで遠い所を見るの

に骨が折れる。三時も大部廻はつた頃に自分は此のやうに僅かの歩行でさへ時間を取り疲勞も甚だしくなつて來たので幾分たりとも早く人の居る所に行き助力を得た方が特策と思ひ又吾々は無事なる事も告げたかつたので他の三名よりも出来る丈歩調を早めて歩く事とした、後の三人は必ず自分の足跡を歩いて來ることゝして、それから自分は千二百米位の所の等高線上を急いで歩いた。振り返へるとオプタテシケ連山、大雪山の連峰は白い清楚な姿を青空に繪き出して居る、眼前の硫黄山は噴煙を青空に掲げて居る、その向ふの富良野岳の崖も陽の光に輝いて見える。それから一時間程してから硫黄山麓の泥流を距てゝ森林の中に柚人等を發見する事が出來た。

温泉の人々、上富良野の人々學校の人々等に依り自分等

は筆紙に盡くされぬ手厚い看護を受け、翌日温泉よりの馬橋に揺られて上富良野の街へ出た。

あの麓までの森林の中を心よい馬鈴の音を聞きながら降つて行く、振り返へつた時樹間よりのオプタテシケ連峰の眺め、青空に聳えてる永久に變らぬ姿の山々も今は自分には異様の姿にも見えた異様な感じがした。併し言ひ知れぬ懐つかしみと言はうか崇高な山波を見ては何時まで見つめても飽き足らぬある親はしいやうな思ひがした。それは自分等を練磨してくれたからではあるまいか。山の自然の力強いあるものによつて自分等は短時間とは言へ山の体とある程度まで同体となり得たからではなからうかしら、山間は吾々をどんな思ひで見下ろした事だらう。(了)

「一九二八年 Alai-Pamir 遠征日誌」より (I)

W. R. Rickmers

古 山 甲 二 抄 譯

七月一日

晴れ。十時ポルドヴァ發。行程は全て登り路だ。廣い驢馬路(殆んど馬車路と同じ位の幅がある)を進みキシアルトの峠に達する。此を圍んでゐるあたりの山は鋸齒の様にギザ／＼してゐる。峠に午後二時半着。兩側の山は三百米程も上部は雪がない。

キシアルトの峠に十五分間休憩して出發したが、此の邊一体はバミールでも景色のよい所の一つである。Markan のアルテルラバート(休憩所)に行くには約三百米ばかりの一寸した登りがあつた。海拔約三千七百米。此處に天幕を張らなければならなかつた。

七月二日

Markan-Su (Kok-Sui) 八時發。小川はサツト凍つて、氷

の厚さは三ミリ位である。吾等は積土があり、草原のある *Karakul* に着する迄は砂丘や積原やいろ／＼の荒地を通過しなくてはならない。此の邊にある石は皆風のために出来たものである。Hingelpass (Uimulak) を越えて *Karakul* の草原が眼もさむるばかり青く見えた時は今まで四面雪の景色と引き換へ、實に嬉しかつた。午後三時半に *Karakul* 湖の北東岸の *Robat-Tukhtai* に到着した。水際まではそれでも一籽位ある。そこにある破れかけた小屋に大麥やその他の荷を倉庫代りに入れた。日光の直射は頗る強い。クリムを附けなかつた人々はヒドク日に焼けた。それに此處は風がよく吹くので乾燥がひどい。海拔四〇〇〇米。ロシア人の人々は高度は新たに正確に測量すべきだと云つてゐる。*Nöih* と *Schneider* の天幕らしいのを見つけたが *Bordoba*

の方から吹いて来た吹雪のために見失つてしまつた。

食料やその他澤山の用意はしてある。薪も充分にあり、大麥と小麥粉が各百袋宛ありその他澤山の貯蔵物がある。Zimmernann は氣象の觀測所を設けた。羊肉は未だ到着してゐないからして豫備の肉を出して食はなければならぬ、だから賃金など云ふものはいゝ加減には出来ないものだ。

七月三日

昨日誰かが云つた様に今日は「天氣曇り小雨」である。人馬共に食事をひかへ目にする。

七月四日

登山家連はスキーに乗つて北側の山に登る。山の上部は一面万年雪で被はれてゐる。頂上は海拔約五七〇〇米。時刻より今後の行動方針を協議する。登山家側はレニーの峰とそしてカラドシルガの谷の氷河を研究するためにカラドシルガ谷に根據點を置くと云ふのだ。Einstervaller は自分の仕事が出来たかの様に喜んでゐる。私は人夫が不足してゐる事を云つてそれを止め様とした。此處にバミール遠征隊は二分されたのである。吾等は九月十日に Tannas に再會合を期待する。

七月五日

登山家連は Nöth と Dorckjeff を伴つて出發す、残つた Allwein や Borchers と雜用をやつたり、藥の調劑をやつたりしてゐる。測量技師 Iwanoff は頂上まで行かなかつた。

六月六日

今朝は玲瓏と澄んで美しい太陽が輝き出る。私にとつては凡てが初めてなので著述する暇があつた。それ故いろいろ山に關して書いて見た。Zimmernann の天氣豫報によると何れもよくない天氣だ。昨日始めて Pilotballon に登つて見た。Judin は日用品の買集めと人夫を調達のため三日間の豫定で Tannas に出かける。ラヂオも組立てができたのでいろ／＼のが感ずる。此處に來てからは一日もいゝ天氣がなくて實に閉口だ。

今日急いで手紙を書いた。何故つて明朝は Schulerbachkohl が Ossi に行くので一緒に頼むために。荷物(は)は三つに分けて家の中に入れてあるがそれも漸次に馬で Tannas に持つて行かなくてはならない荷物である。

七月七日

朝の内は晴れてゐたがそれから二時間ばかり雨が降つた

のですつかり悪い天気になつてしまつた。風は雨を孕んで居ないが雲が低くたなびいてゐる。(南東風)。夜八時頃から風が吹き始めた。風は西に廻る。

七月八日

朝八時頃はよく晴れてゐた。一面に見ゆる山々は白粉をふり掛けた様。天氣は上天氣だが午後から風が吹き出し、急激に寒くなる。Judin 第一號が歸つて來ての話によれば *Fanmas* へ薪と食料品を調達する事が出來たとの事であつた。人夫はあちらで十日ばかり待たなくてはならない。指の爪が伸びたので爪切りをしたら指に傷をつけた。

七月九日

南西岸の小屋へ行くべく七時半驢馬に騎りモスコウ川に沿ふて進む。潟となつてゐる泥、砂原混りの草原、それ等を通して、黄色そのものゝ砂漠(誰も一行中にサハラ砂漠に行つた事のあるものが一人も居ないから砂漠の如何なるものかを知らないのである)を越えて屏風風の様になつた小さい狭谷を過ぎてやつと小屋にたどりついた。小屋は一寸小高い谷の上にある。風が吹いてくると谷間の砂を吹上げて砂の雨を降らせる。そしてその度度に雄大なモスコウ連

山がキラ／＼光つて見える。砂を持つてる風は實に不快だ

七月十日

Kinnek-kul 湖を六時間半かゝつて横断して *Kisil-telas* へ通ずる谷道の東側にある小屋へたどり着く。

今朝 *Finstenwälder* と *Biersack* が歸つて來たがすぐ半島に登つたので夜になつても小屋には歸つて來なかつた。

七月十一日

五時起床。昨夜小雪があつたが今日は空一面紺色だ。が風が吹く。此處は毎日風のない日は殆どない。*Kanar-tschim* は海拔約四二〇〇米。午前九時には五度 *Kanar-tschim* を後にして五時間にして小川のほとりにある *Kings* の小屋に到る。*Waldia* に行く道の別れる所である。朝早く出發したがあまり急がなかつた。何故つて午食時に *Fanmas* の小川を行き過ぎるといけないから。此處は馬の飼料地として利用できる最適地である。馬の飼料として大麥を取り寄せたが乾草も共に使用した。

七月十二日

Fanmas の右岸を向けて出發し四時間にしてその小屋に到いた。一軒ばかり上の方は谷が交叉してゐる。此の狭

谷を迂回してゐる道路の上半分は頗る道路が悪い。馬一匹歩くのにさへ危険に思はれる程である。此の附近が未だに研究の進んでゐないのも敢て不思議とするには足らぬ。そんなに險惡なものだから探險家の一行と馬をいたはりながら連れて行くと云ふ事は頗る困難の事である。此の Tain-

谷は真正の砂漠からは尙二十程程離れてゐる。一行は此の日叢（そこはひどく濕潤の土地であるが）の中に休んだ。忍冬、薔薇、葡萄が繁茂してゐる。そのトゲ／＼した叢の中に深く天幕を張つて風を防ぐ事が出来た。休みなしに吹いてゐる嵐から逃れる事が出来た。午後二時から三時の間に塵煙が見えたので砂漠暴風が谷に近い事を知つた。天幕の中には最小であるが充分の燃料があつたが馬の飼料は少し節約した。飼料は後幾何もつまみから。黄色や灰色に塵だらけになつてゐる此の土地の塵埃は足首が埋まる程の深さである。微細な此の粉末は河泥の固まつたのを人や馬が通行して掘り起したものである。此の邊の川は午前中は水が流れてゐるが、午後になると渴いてしまふのである。Kohlaupt と Perlin は氷河研究の爲め明朝早く出發すると云ふし、Finsterwalder と Biersack は一緒に谷の

左に聳えてゐるなだらかな山へ登ると云ふ。此等の人（先驅者）の出發點とする根據の宿營所を建てる事は難事であるが又人夫の都合や河の渡渉等も亦中々の大仕事である。一生懸命努力すれば或は雪野に隣合つてゐる草原に行く事が出来るかも知れぬ。然し充分忍耐すれば救助策等は暫くの間要るまい。

隊商——前にさう云ふてあつた——は今日 Kankul に歸つて八日の間に二つの隊商となつて再び此處に來なければならぬ。今一緒に居る人々は Rickmers, Biersack, Finsterwalder, Lentz, Kohlaupt, Perlin, Iwanoff, Judin, Osman であるが、外に馬十頭、驢馬一頭である。此處で豪雨にでも遭つたら流されない迄も泥に埋まつてしまふかも知れぬ然し未だいゝ所が見當らない。

七月十三日

Kohlaupt は Perlin を連れて出發する。一つは Tanimas の氷河の研究に、一つは通路の調査のためである Finsterwalder と Biersack は谷の左の山へ登りに出掛ける。

雜 錄

インターカレナスキー大会、記念シヤンツエ開き、全北海道選手権大会の経過と感想とを書いて貰ふ筈になつてゐた廣田戸七郎高橋昂の兩氏を始め北大スキー部員の大部分が大会終了後間もなく全日本選手権大会に参加すべく立つてしまはれたので、二月號に間に合ひませんでしたから來月號にこの三競技會の記事を掲ぐることに致します。

「山とスキー」のバツケナンバ

唯今左の號數の殘本を所持して居ます。御希望の方には喜んで御煩ちします。

- 第一年目 (一號—一五號) 一二號と一五號
- 第二年目 (一六號—二六號) 一八號から二六號まで
- 第三年目 (二七號—三七號) 三五號だけ
- 第四年目 (三八號—四九號) 三九號から四九號まで
- 第五年目 (五〇號—六〇號) 五一號と五三號から五五號まで
- 第六年目 (六一號—七二號) 六一號から六四號と六七號から七二號まで
- 第七年目 (七三號—八三號) 七三號から八二號まで
- 第八年目 (八四號—九四號) 八三號から九四號まで

◆スキー講演集刊行

本會から刊行の山とスキー講演集(第一)の内容は次の通りです。御愛讀を希望いたします。

山とスキー講演集目次

- スキー民衆化と其の施設 北大教授 大野精七
- スキー家の心得置くべき衛生 北大教授 柳 壯 一
- 初歩のスキー術 北大スキー部 南波初太郎
- スキー材の選び方 北海道廳 林 常 夫
- ゲレンデスキー術について 小樽高商 高橋次郎
- スキー競技に進む人達へ 教 授 廣田戸七郎
- デイスタンス カリムヒツク 高 橋 昂
- ジャムブの練習法と 北大スキー部 村 金 彌
- 複合競技の要領 若 老 會 酒 井 隆 吉
- ドイツに於ける アマチュアスキー 廣田戸七郎
- 諾威スキー選手を案内しての感想
- 尚この本の定價は五十錢以内で提供したいと考へて居ります。

◆寄贈並新刊圖書

- 東京登山會々報 第六年號 東京登山會
- The Ski Club of Great Britain Ski Notes No. 10
- 1929 winter 1930 Annals Lake of placid Club.

編輯後記

廣田さんの「スキージャムビング」も豫定より遅れて漸く本誌二月號の校正を終つた日出來上りまして、豫約の方に對して、發送致しました。

この本が出來上るまでに、著者廣田さんに對してはどの位忙しい思ひ苦勞をかけたか知れませんが、全くお氣の毒かけました。

病院の勤務の傍ら、記念シヤンツェ開き、インターカレヂスキー大會、北海道選手権大會と次から次へ忙しい目にあつて居られる間に、執筆されたもので、斯うしたなかをこれだけに仕上げられたのは全くスキー技に對する廣田さんの眞劍味の致す處で、そしてまた恩師大野先生の力も預つて力あつたことと思ひます。思つただけでも氣持のよいことです。たゞ經費の都合で印刷部數に制限があつたことは全く著者に對してはお氣の毒で仕方がありませんが、この點を充分に理解して、本會のためにこの「スキージャムビング」を書いて頂いたことを衷心より感謝して居ります。

お蔭で、無事に生れたこのスキージャムビングは、各地のスキー団体、若しくはスキー技の研究者達から申込みを受けて、出版したゞけは間もなく捌けてしまひさうです。お望みの方は、なるべく早く御通知下さることを希望致します。

來るべきシーズンには、愈々カリムヒツク行きの選手を選ぶべき時であらうと思ひます。兎に角、このスキージャムビングは、その競技に出場するジャムプの選手達に對し、且つ又之を見る人々に對して何物かを與へることを信じて居ります。

本シーズン中の行事であつた、記念シヤンツェ開き、インタ

「カレヂスキー大會、北海道選手権大會も終つて、スキーの街札幌も一寸一息ついてゐますが、大鰐に遠征の選手が歸つてくるとまもなく北海タイムス社主催で全道中等學校のスキー競技會があり、且つ又引續き「スキーを穿いた」市長さんを會長に廣田さんや高橋昂さんが骨折つて居られる札幌スキー聯盟の主催で宮様御來道記念スキー大會が催されることになつて居ります。寒氣もひどくなし暴れもなく雪が些げない位が——と言つて競技に差支るほどでもありませんから、振ふことと思ひます。

お詫することが二つあります。その一つ前號に記念シヤンツェは、ノルウェーのヘルセット中尉から設計圖が來て、工事をやつたやうに書いてありましたが、あれは廣田さんがヘルセット中尉の引いた線を、工事請負者の高橋氏に取らしておかれたもので、新聞記事をそのまま借用した編輯者の不注意でありました。

今一つは、武野さんから頂いた立山の寫眞を大雪山として出したことです。どうぞ悪しからず。

札幌放送局が昨年春放送したスキー講演を編輯して、スキー講演集として出版しましたが、まだ些しばかり残つて居て、山とスキーの會へ届けられました。定價は四十五錢です。御希望の方は申込んで頂きます。

山とスキーで刊行のスキー講演集の方(前號豫告)は、少々遅れましたが、準備はすつかり整ひましたから、印刷出來上り次第前者と同じ位の定價で配布したいと思つて居ります。

終りに、秩父アルプススキー登山を書いて下さつた小池さんと十勝遭難記を書かれた大戸さんに厚くお禮申上ります。また神戸のRCC俱樂部と神戸スキー俱樂部から立派な報告を寄贈して頂きましたことを感謝致します。(一九三〇・二・三記 寛)

著 郎 七 戸 田 廣

ガンピムヤジーキス

行刊會の一キスご山

本著はスキー競技に於て最も重要なスキージヤムプの一切を解説したものです。

前號に豫告して置きましたスキージヤムピングは愈々出来上りました。どうぞ御愛讀を願ひます。

御希望の方は振替口座
小樽八四九五番「山と
スキーの會」宛へ御申
込と同時に御振込下さ
い。

四六判

別刷寫眞版三十二頁
挿入圖版四十餘圖

定價 金壹圓五拾錢

送料 金六錢

GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!



具用其トーキスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

青 山 温 泉

北海の靈峰

マツカリヌブリに

連亘する

シリベシの山稜

山稜を飾る

タンネンホイメと

アルフェルシユネー

東洋のサンモリツツと

稱せらるゝ

理想的スキ―地

井出さんの

「青山温泉の思ひ出」

のなから

ほか／＼と暖い日を浴びながら、只餘の雪の下から甦つて来る力強い春の囁きに耳を傾けてゐる時、私の頭に最も明かに浮んで来ることは、御警備班の一員として、秩父宮殿下のスキ―一行に御供し奉つた光榮ある青山温泉不老閣に於ける三日間の生活であります。

エツイルインの物語を想ひ起させる様な、珍らしく暗示的な雪は折からの夕陽に例へ様もない程見事な黄金色に映えて居りました。チセヌブリの畫く柔く曲線と、ニセコアンの清楚な姿、マツカリヌブリの嚴めしい山影は、銀色と灰色それに黄金色の美しい階調の中に聳えて居りました。その様な美しい背景に飾られた昆布驛へ降り立たせられました殿下には恐れ多くも誠に粗末な馬櫓へ御乗り遊されまして青山温泉に向はせられました。

函館本線昆布驛より一里半

函館より一七時間

札幌より一五時間

アメリカ直輸入

ヒツコリースキー材

シュブルングスキー
ラングラウフスキー
一般用スキー

Haga Ski



スキー附屬品

芳賀スキー商店

札幌市圓山四丁目
北海道

高級スキウツクス
オリエント

發 賣 元
飯 田 商 會

札幌市南一條東二丁目

あなたの

スキーな

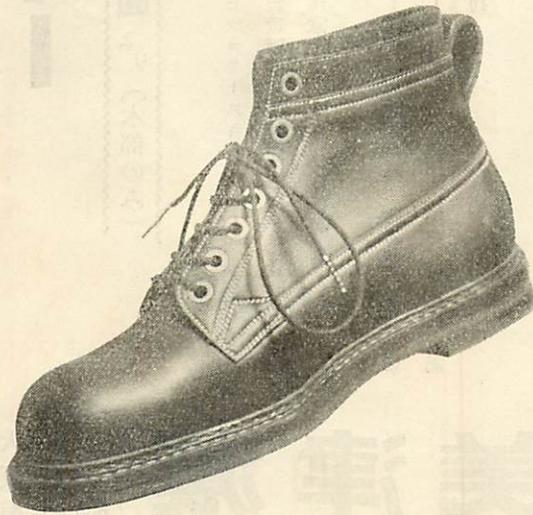
スケート靴は？

イワ井

知れた

札幌の！！

【御申越次第カタログ進呈す】



札幌市南一條西二丁目

岩井靴店

電話一三四番



外國品に勝る 日本最優良の

登録
商標

ヒッコリースキー

定 價 十 五 圓 以 上 (木部のみ)



弊社製ヒッコリースキーに對し悪宣傳をなし且
偽物を製造販賣せる奸商がおります故品質に付
十分御注意下さいませ

スキー兩杖 スキー金具 その他附屬品一切
スキー服 ブボン 帽子 手袋 その他附屬
品一切

スキーワックス多數新輪着

カストバイ メジウム
カストバイ ミツクス
カストバイ クリステル

濃 津 美

神 戸
東 京
大 阪

大 阪 南
名 古 屋
京 都

卸部……大阪 淀屋橋
工場……大阪 淀屋橋

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します。又印譜の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお送りいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介。縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和五年二月三日印刷

昭和五年二月七日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寬

印刷兼 發行者 長 野 寬

北海道札幌市北一條西二丁目

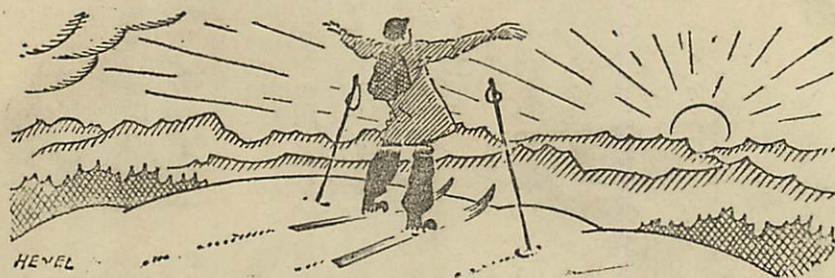
印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北一條西三三丁目

發行所 山とスキーの會

振替水櫃八四九五番

La Gazeto
 de la
 Monta kaj Skia Clubo
 No. 98. Februaro 1930 Sapporo, Japanujo.



MIMATSU
 MAPLE TOUREN SKIS!

帝大山岳スキー部、早大早高山岳部
 學習院山岳部、陸軍戸山學校、一高、三高
 四高旅行部、法大山岳部等、等、等…御用

冬山登山用具各種

手打「スタイガイセン」6本8本10本爪
 手打永斧「ツエルマツト號」30cm.
 檢定済「グレチャーザイル」

“META” 燃料及び各種コツヘルアパラート
 塗臘用パラ・アパラタト (¥.150)

北米ウキレスロー・スケート會社總代理店
 スイス、META 製造會社日本代理店

合名會社

美 満 津 商 店

東京・本郷・赤門前

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
 昭和五年二月七日印刷
 昭和五年二月七日發行

山とスキー

第九十八號

定價金參拾錢